

# 関西学院大学 研究成果報告

2023年 10月 2日

関西学院 院長殿

所属：国際学部  
職名：教授  
氏名：高村峰生

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：イギリス ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間 <input type="checkbox"/> 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	現代アメリカ文学・文化におけるディストピア
研究実施場所	ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校
研究期間	2023年 4月 7日 ～ 2023年 9月 14日（ 5ヶ月）

## ◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

2022年度よりマーガレット・アトウッドの『侍女の物語』やジョージ・オーウェルの『1984年』のアダプテーション作品を中心に発表や論文執筆を行ってきた。今回の留学における研究テーマはその発展的な課題である。受け入れ教員のアダム・ロバーツ先生は現役のSF小説家であるだけでなく、古今の英米文学に非常に造詣の深い方であった。4月から5月にかけて3度ほど大学研究室の内外でお会いし、研究について話し合うことが出来た。また、その過程においてロバーツ氏自身のディストピア的設定を持つ作品 *The This* を読み、それについて議論を交わした。

4月にはこの春逝去された大江健三郎氏をめぐる特集号に寄稿を求められ、大江健三郎の作品を読み直すこともなった。イギリス滞在の利点を生かすべく、チャールズ・ディケンズの *The Old Curiosity Shop* への言及を多く含む『キルプの軍団』を集中的に読解し、4月末から5月初旬にかけて論文に仕上げた。その成果は雑誌『ユリイカ』の大江健三郎特集号に掲載されている。

5月30日以降、大学は夏休み期間となったので、拠点をロイヤル・ホロウェイ校の近くから、ロンドン市内へと移した。新しく借りた住居から所属先の大学図書館へは1時間ほどかかるので、あらたに徒歩で通える場所にある London South Bank University の図書館利用を出来るように図書カードを作り、特に必要がない限り、ここを研究の拠点とした。この図書館は蔵書が限られていたので、アマゾンのキンドル（電子書籍）を大いに利用することになった。また、専門書の類は市内北部にあるイギリス最大の図書館であ

る大英図書館を利用した。地の利を生かしNational Theatreを含む多くの劇場において観劇をした。これらの観劇のうちには直接的に研究課題とかかわる作品ばかりではないが、シェイクスピア作品をはじめとして、英米文学研究者として長期的には研究の土台となるような作品を原語で鑑賞する貴重な機会となった。同様に大英博物館、テイトブリテン、テイトモダンなどへ容易にアクセスできる環境を生かし、狭い意味での研究課題にとらわれることなく、今後の研究に資するような広い知見を養うことにも注力した。この時期、もともと関心の深かったロマン派詩人キーツやシェリーの作品の読解も進め、それらに現れるギリシア神話のモチーフにも関心を深めた。このことは大英博物館におけるギリシア、エジプト、ペルシアなどの古代遺物や彫刻の鑑賞と有機的に結びつき、在留研究機関中のパリやウィーン、アテネへの出張時に美術館に赴き、これらのモチーフのさらなる研究へと発展した。これらは当初予定していなかった研究テーマであったが、帰国後の研究に指針を与えることになり、現在はモダニズム期のアイルランド詩人であり劇作家であるウィリアム・バトラー・イェイツにおけるケルト神話のモチーフへの関心へと結びついている。イェイツの神話への関心は、20世紀前半におけるアイルランドの独立運動とも結びついているし、アテネにおけるイギリスの発掘作業は19世紀前半のギリシア独立運動とも結びついている。したがって、これらの近代における神話の再生とナショナリズムの関係は深く、これらは大きく言えば非リアリズム的なユートピア幻想ともかかわりがあると言えるだろう。ディストピア研究は、このように当初予期していなかった方向性から神話世界の語り直しというテーマと結びつくことになった。また、この副産物として、ロンドン市内にあるローマ時代の遺跡や遺物、初期キリスト教の浸透、ミトラ教の遺跡などにも関心を持ち、これらのテーマに関連する地域を精力的に探査した。これらの経験は、今後、自分の研究テーマをより大きな視座から再考し、歴史的にとらえ返すための土台となるだろうと思われる。

また、上記の研究とは別に、近現代ディストピア文学の重要なインスピレーション源ともいえるフランツ・カフカの作品や、ミレナやフェリーツェといった恋人たちへの手紙を日本語、英語、ドイツ語で集中的に読み、プラハへの出張時には、彼の作品の母体となるプラハの旧ユダヤ人地区を訪問し、かつ彼の暮らした家や、草稿を展示している博物館などを訪問することが出来た。これらの経験も、今後のカフカ文学の理解に資すると思われる。

二度のオックスフォード大学図書館訪問では、所属先の図書館では不十分な文献の調査を行った。ジョージ・オーウェルに関する研究文献がその中心である。

さらに、ロンドン市内にあるフロイト博物館の訪問では、20世紀初頭の精神分析と神話や人類学の深い結びつきについて知見を深めることが出来た。上記のギリシア神話への関心と結びつき、フロイトの古代への関心がいかに精神世界を語る上での基礎となっているかを知ることが出来た。私の専門の20世紀前半のモダニズム研究を深めていくうえで、重要な視座を得ることが出来た。

こうした研究に加え、6月から8月にかけては、私自身が2年ほど前から行っている創作活動にも一定の時間を割いた。文学研究は実作を通じてより立体的な理解を得ることが出来るということを実感することが出来た。思っていたほどの成果は出なかったが、短編を二つ書くことが出来た。また、すでに日本語で発表した別の作品は英語に翻訳し、アダム・ロバーツ氏に講評をもらうことが出来た。

このように、ロンドン在住という地の利を生かし、より長期的な文学研究の糧となるような研究を、学務を離れて半年関することが出来た。大変実りのある5か月間となり、今後の研究に大いに生かしていきたいと思う。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高  
中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に  
支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。